

- 社会科の授業のアイデアを広げたい!
- 具体的な実践事例を知りたい!
- 「社会研究ノート」ってどのように使うの?

そんな先生方のための通信シリーズです。第3回目は「研究ノート」を採用いただいている、東京都足立区立第七中学校の中村等先生に、教材とICT活用についてのお考えと実践についてうかがいました。



Q.1 「資料」が社会科の授業に与える影響について、お話しください。

A 私自身が中学生だった頃の社会科の教科書は、全てモノクロで、分厚くて重いうえに文章の一つ一つが長文で、内容にも中々興味・関心をもてませんでした。教科書に出てくる重要用語を示す「太い文字」の言葉の意味についても難解で、理解するのに苦労しました。

翻って現在の教科書は、カラー写真や豊富な資料などから内容をイメージしやすくなったので、生徒たちの社会科に対する興味・関心を喚起させる可能性があることを、生徒へのアンケート調査などから再確認できました。

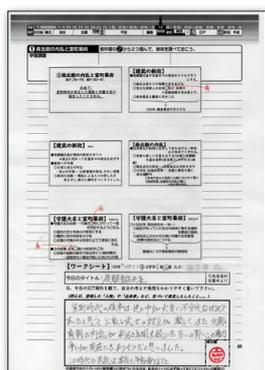


実際に授業の最初か終盤に関連する「映像」などの資料を視聴させながら、A6サイズほどの「小さなワークシート」に気づいて発見したことや感想などを具体的に記入させます。まとめた頃を見はからって1~2名の生徒に発表させます。発表を通して生徒によって着眼点がそれぞれ異なっていることに気づき、そのことが生徒の関心につながり、自然と授業の流れへと連動していくといった、雰囲気づくりにも役立ちました。

Q.2 授業に「ICT」を取り込むことで、どのような学習効果が期待できますか?

A デジタル教科書は、現在使用していません。その代わりに、本時の授業で使用する「板書プリント」を配布し、ポイントとなる「流れ」➡「キーワード」➡「まとめ」をモニターで表示して、確認したら「研究ノート」見開きの右ページ(ノート欄)に「板書プリント」を貼らせます。他にも生徒が持っている「資料集」などのページを指定し、「資料集」のデジタル写真や資料もモニターに表示して、手元にある「資料集」で生徒自身に比較させています。

言葉では伝わりにくい概念なども資料を上手く活用することで理解を深める効果が期待できます。



▲研究ノート(ノート欄)

教師が板書すると生徒はひたすら書き写す作業をします。教師が肝心な説明や解説を伝えようとしても聞くのが困難です。教室には多様な生徒が存在しています。中には一つの作業をやるのが精一杯で、授業を聞くこともなく終わってしまう生徒もいます。そこで「板書プリント」を事前に準備しておくことで授業に集中できるようになります。授業の最後には、振り返りの時間として「研究ノート」の左ページにある「問題ドリル」を5~7分程度かけて確認し、時間に余裕があれば丸付け作業まで行います。授業時間での疑問や十分理解できなかったことを見直すことで、自宅の復習時に再度「研究ノート」を開いて振り返る習慣が身につく、更なる学力向上に繋がります。



▲研究ノート(問題ドリル)

Q.3 「研究ノート」とICTを上手く活用した授業実践を、もう少し詳しく教えてください。

A 以前、授業時間内で教え理解させなければならぬ内容が板書だけでは間に合わず、計画通りに進まないことがありました。準備9割が授業成功の秘訣といわれるなかで、授業のない空き時間が殆どなく、資料を吟味するなどの教材研究の時間の確保が厳しいのが現状です。

現実問題として「働き方改革」を実行するには、教員の増員がない限り教員一人のマンパワーに頼るのは限界があります。私の場合、「研究ノート」の教師用書に掲載されている板書例を参考に予め作成しておいた「板書プリント」を生徒へ印刷配布し、プリントと同じ内容をモニターに表示します。

パワーポイントを使って授業のポイントとなる「流れ」→「キーワード」→「まとめ」を表示し、生徒へ配布した「板書プリント」を「研究ノート」見開きの右ページに必ず貼るように事前に指示を伝え、生徒は「板書プリント」

の空欄箇所の記入作業を自発的に取り組みます。また、ラインマーカーや色ペンで自由に追加記入させます。

またQ1でもお伝えしました、ICT機器で視聴した「映像」などをまとめた「ワークシート」を「研究ノート」に関連するページにリンクするように貼らせます。

更に「研究ノート」は、他の教科でも使用する市販ノートを兼ねていることで、ノート忘れの防止にもなります。

従来の学習プロセスでの、厚い教科書に長文とモノクロ写真でのイメージしづらい資料から、今では当たり前となったカラー資料に画像の拡大・縮小が可能となったことで、インパクトを与えられる資料がふんだんに使える学習プロセスに刷新されました。

教師が板書した文字を書き写すだけで学力が本当に定着しているかといえば疑問が残ります。個別に対応できる更なるデジタル教材や機器を活用していくことで今後、一層の授業改善が進むと考えられます。

Q.4 社会科の授業で、普段から心掛けている点についてお話しください。

A 定期的に「研究ノート」の回収チェックを行い、自分の学習ノートとして、うまく活用できているかを評価・評定の材料としています。

毎回、地理・歴史・公民の授業では、過去・現在・未来の時間と関連づけて我々の日常生活が豊かになっていることの視点から、簡単な疑問を生徒へ問いかけるようにしています。その際にトランプカードの数字を引き、ローカル・ルールで当選者に解答権を与えて発表させます。仮に不正解であっても自分で考えた答えには、加点を付けています。このことで緊張感が生まれ、授業も活気づきます。

発表では、気をつけ心掛けていることがあります。本人が固定観念にとらわれず発表できるように、

①ノーヒント ②第1ヒント ③第2ヒントというチャンスを与えることを心掛けています。

また、時々グループワーク（3～4人）で話し合っている様子を観察し、テーマに対して異なる意見交換の中から興味・関心につながる着眼点などを加点しています。発表は苦手だが、発想がユニークなど、様々な部分を見とれる様に机間巡視します。生徒の性格や特性に応じ

て、「褒める」ケースと「もう少しかな」など、授業のポイントをおさえているか否か、本気で取り組んでいるか否かを評価していることも生徒自身に理解させています。

最後に最近感銘を受けた人物を紹介します。戦後の半世紀以上にわたり教育者として活躍された「大村はま」教諭の印象深いコメントです。“教師が成長するために学び続けることは、生徒と同じ床に立ち、同じ世界に居ること”生徒が安心して授業に臨めるように教師の「新鮮さ」「謙虚さ」を大切にされ、同じ資料を使って授業をすることがなかったといいます。更に“昨日よりも今日という風に、何か気づいたり工夫したりして、教師自身に成長の実感がなくては、いきいきと指導にあたる力、生徒を動かす迫力が、出てこない。”教育とは生徒のために何ができるかという、自らの生き方をかけた、大人たちの挑戦にほかならない。

私も日々、研鑽されている教育分野や企業に携わる方々とともに新しい時代に合った教材・授業開発に挑戦しつづけたいと思います。



秀学社webサイトからもご覧いただけます。

<https://www.shugakusha.co.jp/>

■秀学社は中学校の社会科教材を発行しております。教材についてご要望がございましたら、弊社HP「お問い合わせフォーム」まで、ぜひお知らせくださいませ。